

『愛人』の中の母と風景
——ヴィンロン，サデック，サイゴン——

佐藤 浩子

Mère et Paysages dans *L'Amant*
—Vinh Long, Sadéc, Saigon—

Hiroko SATO

要 旨

現代フランス文学を代表する作家マルグリット・デュラスは、1996年3月3日、パリ、サン・ブノワ通りの自宅で亡くなった。「18歳で私は年老いた」と述べたデュラスの作品のテーマは、そのほとんどが子供時代に起源を持つ。子供時代のデュラスにとって母親はかけがえない存在であった。デュラスはインドシナの風景の中で育まれた体験を、植民地の社会の犠牲となった母親を、親切で信じやすかった母親を作家になって描いた。『太平洋の防波堤』*Un barrage contre le Pacifique* (1950) から始まる母親との葛藤は『愛人』*L'Amant* (1984) の中で終わった。デュラスにとってインドシナは作品のすべてであった。1996年の夏に私はデュラスが子供時代と思春期の大部分を過ごしたヴィンロン，サデック，サイゴンを訪れた。これらの土地はデュラスの小説『愛人』の舞台である。そして『愛人』の中に描かれた母親と娘の葛藤の舞台となったインドシナの風景の中に伝記的事実を求めた。

キーワード：インドシナ，風景，母親，伝記，作家

1. はじめに

現代フランス文学の代表的な作家マルグリット・デュラスは、1996年3月3日、パリ、サン・ブノワ通りの自宅で81年の生涯を閉じた。デュラスの作家としての活動は小説，戯曲，シナリオ，時事評論そして多くの対談やインタビューと広範囲に及んでいた。顔全体に刻まれた深いしわは、作家の人生が「生きること」，「書くこと」そして「映画を撮ること」において

いかに激しく、精力的かつ情熱的であったかを物語っている。「18歳で私は年老いた」¹⁾と述べたデュラスの作品のテーマは、そのほとんどが子供時代に起源を持っている。

—ところで子供時代をのぞいて、人生の他の時期が小説に着想を与えたことがありますか。—
—いいえ。子供時代の他はどんな時期も何も与えていません。とは言え、私にとって人生のこの時期は他の人たちにとっての子供時代以上に重要であったわけではありません。しかしもし作家が常に子供時代を話題にするなら、それは私たちの生活の絶対的な受容の時期を問題にしているからです。子供にとってはどんな出来事も全く不当なものです。それは人生全体にわたって私たちに強い精神的ショックを生み出します。子供時代がなければ、精神分析は存在しないでしょう²⁾。

子供時代のデュラスにとって母親はかけがえのない存在であった。デュラスの母親マリ・ルグランは、1877年に北フランスのパ・ド・カレー県の農家の娘として生まれた。学校の成績が大変良かった彼女は、師範学校の給費生となり、小学校の教師になる。その後、フランスの南西、ロ・エ・ガロンヌ県出身の数学の教師エミール・ドナデューと結婚、当時フランスの植民地であったインドシナへ渡る。1909年に上の兄ピエールが、12年には下の兄ポールが、そして14年にマルグリットが生まれる。父親はハノイ、トンキン、カンボジアの学校の校長に任命され、家族は平和で、安定した、豊かな生活を送った。この頃の何年かが母親の生涯において最も幸福な時期であった。

サイゴンの近郊ジアディンに生まれたデュラスは、18歳の時にフランスに戻るまで子供時代と思春期の大部分をインドシナの各地で過ごした。母親とデュラスとの関係はインドシナの風景を抜きには考えられない。このインドシナの風景の中で母親はどのように描かれているのであろうか。

1996年の夏に私はデュラスがこの時期を過ごしたヴィンロン、サデック、サイゴンを訪れた。これらの土地はデュラスの小説『愛人』の舞台であり、すべての出来事はこれらの土地で1914年から32年の間に起きたのである。インドシナの風景とともに描かれた母親の姿と母親とデュラスとの関係を今回訪れた三つの場所ヴィンロン、サデック、サイゴンを中心に『愛人』の中に見てみよう。

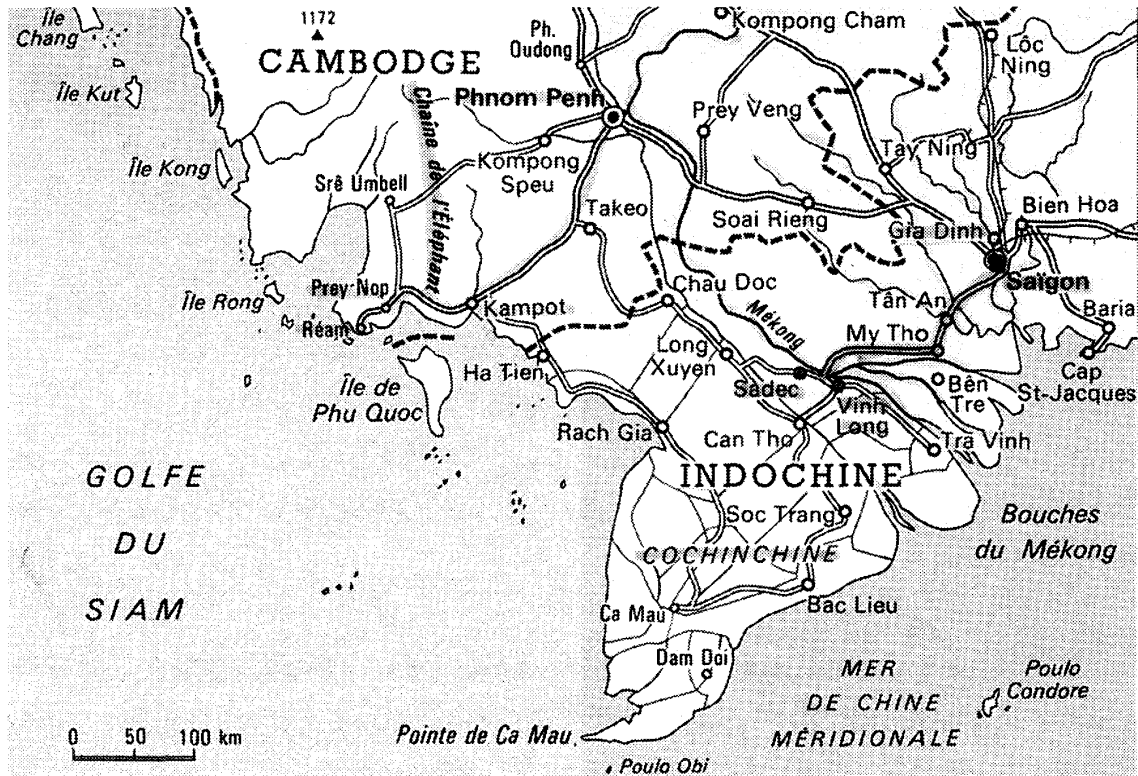


図1 フランス統治時代のインドシナ

2. ヴィンロン

ヴィンロンはサイゴン（現ホーチミン市）から南西に約200キロ、車で4時間程のところにある。メコン河の支流ティエンザン（前江）をフェリーで渡り、船着き場から東に向うとまも



図2 ヴィンロン

なくである。川岸には水上生活者の小舟が行き交う。生い茂る木々の下をくぐり、アヒルの群れを眺め、この支流からさらに細い水路に入ると、ビンホアフック村の果樹園がある。色とりどりの熱帯の果物があふれ、メコンの自然が息づく水の国である。

1918年にデュラスの父親はプノンペンの学校の校長に任命された。しかし彼はプノンペンに赴任した直後、病気のためフランスに帰国させられる。母親は夫に同行してフランスには帰らずに「インドシナのこの地にしがみつくように、使命の虜になったように子供たちを育てるため一人残る。すでにその時からドナデュー家の業は始まっていた」³⁾のである。

母親はプノンペンで夫の死を知る。夫の死後、母親は休暇をとり、子供たちとロ・エ・ガロンヌの家へ一時戻る。このフランスでの滞在の後に母親は再びインドシナへ、メコンデルタのヴィンロンに戻ったのである。当時、少女であったデュラスの眼にヴィンロンはどのように映ったのであろうか。

そこはコーチシナの低木が生い茂る地域である。すでに「鳥たちの平野」、私が想像する最も大きな水の国である⁴⁾。メコン河の支流はヴィンロンとサデックの間を、コーチシナ南部の一面の泥と稲田、あの「鳥たちの平野」の中を流れて行く。

母親が居を構えたのはこの水の国である。その家は並木道に囲まれた白人駐留区にあり、中庭のある家であった。

家は盛土をした上に建てられ、その盛土で庭から切り離されているので、蛇も、さそりも、赤蟻も入ってこないし、季節風のすごい竜巻のあとで必ず訪れるメコン河の氾濫も免れる。

母親は三人の子供をかかえ、現地の子供たちにフランス語と算数を教え生計を得ていた。生活は父親が生きていた頃のように豊かではなかった。しかし母親が幸福感に浸る時があった。それは彼女が「家を隅から隅まで、きれいにするため、健康的に、さっぱりさせるため、床から天井まで洗わせる」時であった。

(すべてを)忘れていられる時間、家を洗う時間は母親の幸福感に似つかわしい。母親は客間に行く、ピアノに向かう、覚えているわずかばかりの曲を弾く、師範学校で習った曲。彼女は歌う。ときどき彼女はふざける、笑う。立ち上り、それから歌いながら踊る。

『愛人』の中の母と風景

そしてみんなが考える、彼女も、母親も考える、こんな歪んだ家、突如として池に、川のほとりの畑に、浅瀬に、浜辺になってしまうこんな家に住んでいてもうれしい気持ちになれるのだということ。

そして子供たちにも同じように幸福な時が、このような母親を持って幸運だと思える時があった。

母は気持が沈んでくると、小さな二輪馬車に馬をつながせて、みんなで乾季の夜を眺めに野原に出た。[……] 空から光が一面の透明な滝となって、沈黙と不動の竜巻となって落ちてきた。空気は青く、手の中につかめた。青い空気。空は光の輝きのあの持続的な脈動だった。夜はすべてを、見はるかす限り河の兩岸の野原のすべてを照らしていた。

ヴィンロンでのこの時期は貧しさの中にも幸福感を見出せた時期である。だが1926年に母親は儉約して蓄えたすべての財産を投じてカンボジアのプレノップに払い下げ地を購入する。それは後に耕作不能な土地であることが発覚し、母親は土地管理局の役人の不正による被害に遭ったことに気づく。彼女は役人の不正に負けることなく、自然の力、太平洋の荒波と闘う姿勢を示す。それは役人の不正に対する母親の怒り、死ぬほどの母親の怒りの表れであった。そして「家族みんなにかかわったあの破産と死の物語」の始まりであったのであった⁵⁾。

3. サデック

サデックはヴィンロンとは反対の位置にあり、やはりメコン河の支流ティエンザン（前江）をフェリーで渡る。東南アジア最大の大河メコンは、チベット高原にその源流を發し、ミャンマー、タイ、ラオス、カンボジアを経て、ベトナム南部に広大なデルタを形成し、南シナ海に流れ込む。その流れは今も昔と変わらず速く、河はデルタの泥の色を反映している。フェリーを降り、船着き場から西に向うと町の中心に出る。商店が立ち並ぶ賑やかな通りを抜け、閑静になり始めた所にデュラスの母親が校長をしていた女子小学校がある。現在も当時と同じ女子小学校であり、いくつかの教室の他に、図書室、教員室を備えた平屋建ての小さな学校である。この学校を私が訪問した日は、幸運にも夏季休暇中の週二回の登校日にあたり、若い女性の先生が子供たちにフランス語を教える姿に接する機会に恵まれた。突然の私の訪問に子供たちはフランス語の歌を歌い、フランス語で自己紹介をして歓迎してくれた。子供たちの眼は輝き、



図3 サデックの女子小学校

躍動するベトナムの明るい未来をうかがわせる。そしてこの若い先生の姿にデュラスの母親の姿が重なり、当時が甦る。

1927年にデュラスの母親はサデックの女子小学校の校長に任命される。母親はここで現地の子供たちにフランス語を教え、学校に隣接する官舎に住んでいた。母親は白人として社会的には支配階級に属していたが、現地人小学校の教師の仕事は白人社会の最下層に位置し、経済的にも豊かではなく、インドシナの農民と同じ立場に置かれていた。

私たちの家ではお祝いをするということはただの一度もない、クリスマス・ツリーを飾ることもないし、刺繍のハンカチーフを使うこともなく、花が飾られることもない。そればかりか、死者のための行事もない、墓もなく、思い出もない。私たちの家とは母一人だけのことなのだ。

その頃、母親はすでにカンボジアに購入した払い下げ地の問題をかかえ、彼女は貧しさに取りつかれていた。この些細な仕事と貧しさがもたらす悲惨さはほぼ永続的に母親の人生につき

まとったのである。サデックの小学校は母親と家族の生活の場であり、母親と娘の葛藤の場であった。

デュラスはこの頃すでにサイゴンの高校に通い、国営の寮に住んでいた。娘が中等教育を受け、数学の大学教授資格試験に合格することが母親の夢であった。サデックの母親の家で休暇を過ごした後、サイゴンの寮に帰る時はいつも母親は娘をバス停まで送りに来た。そこには娘を想う母親の姿が描き出される。

現地人用バスはサデックの市の立つ広場から出た。いつものように母がついてきてくれて、運転手にこの子を頼みますよと言った、いつでも母はサイゴンのバスの運転手に、事故があったら、火事が、暴行が、バスの乗っ取りが、渡し船のとんでもない事故があったりしたらこの子を頼みますよと言うのだ。いつものように運転手は、自分の横の、前の座席に、白人旅客用の席に私を座らせた。

デュラスが15歳の時、愛人となった中国人との出会いはサイゴンへ向う渡し船の上であった。デュラスはそのことを母親に話したことはない。「話していたら殺されていたでしょう」と彼女はあるインタビューで述べている⁶⁾。サイゴンのチョロン地区で実際に何が起きたかは母親も兄たちも何も知らない。しかし母親は娘を観察し、気づいていた。それは「母親の人生に突然訪れた激しい不安」であった。そして母親は怒りを爆発させたのである。

発作を起こすと母は私に跳びかかる、部屋に閉じ込める、拳骨でなぐる、平手打ちをくわせる、服を剥ぎとる、私に近づく、私の身体と下着の臭いをかぐ、あの中国人の香水の匂いがすると言う、そればかりか下着に何かうさんくさいしみがついていないか穴のあくように見て、それから街中に聞こえるほど大声でわめきだす、うちの娘は娼婦だ。

母親の狂気はすべての怒りの爆発であった。払い下げ地に対する役人の不正への怒り、社会のルールを破り、家族の不名誉となるような娘の素行への怒り、そして「快樂を知らなかった」母親の娘に対する嫉妬の怒りであった。母親と娘の間には愛と憎しみが混ざり合った複雑な感情が存在していたのである。

母親の怒りを爆発させるに至ったのは、「あの映像」メコン河を横断する渡し船の上での中国人との出会いであった。



図4 メコン河

大海原へと下って行くメコン河とその支流，大海原という空洞へと，下り下ってやがて消えて行くこの水の領域。見はるかす一面の単調さの中の，この河，その流れは速い，まるで大地が傾いているかのように注ぎこむ。

メコン河の流れは母親と娘の葛藤を象徴し，その濁流は母親と娘の関係そのものであった。そして二人の葛藤も二人の関係もメコン河が呑み込んでいったのである。

4. サイゴン

1975年の解放後，現在のホーチミン市になったサイゴンはベトナム最大の都市である。サイゴンが都市として確立し，本格的に発達したのは19世紀の半ば，フランス統治時代のことである。そのため街の随所に統治時代の面影が残る。19世紀末に建てられたサイゴン大教会（聖母マリア教会），大教会の横にある中央郵便局，ロータリーから放射線状に広がる並木に覆われた街路，そこにはフランスがある。デュラスがシャッスルー＝ローバ高校（le lycée Chas-



図5 サイゴンの港

seloup-Laubat)に通い、国営のリオテイ寮 (la pension Lyautey) で生活していたのはサイゴンがプチ・パリと呼ばれていた時代である。

当時、「インドシナとフランスを結んでいたのは、フランス郵船会社の美しい大型客船、この航路の三銃士、ポルトス号、ダルタニヤン号、アラミス号であった。[……] 大型客船はエンジンを停めて、タグボートに曳かれてサイゴン川を遡り、サイゴンと同じ緯度のメコン河湾曲部にある港湾施設までくるのだった」。

1932年に母親と子供たちはサイゴンの港からフランスへ帰国の途についた。母親はカンボジアのプレノップに購入した払い下げ地への夢を諦め、その土地を放棄し、家と家財道具のすべてを処分して帰国の途についた。

出発の時刻が近づくと、船は汽笛を三回、長く長く、恐ろしい力で鳴らす、その音は町中で聞いた、そして港の方の空は次第に暗くなっていった。それから、タグボートが船に近づき、川の中央部にまで曳いて行く。それが終ると、タグボートは曳綱をほどき、港に戻ってくる。それから船はもう一度別れを告げる、もう一度、恐ろしいいななきの

声を発するのだが、その声は神秘的までに悲しく、人々の涙を誘う。

母親はインドシナへの夢を諦め、挫折と幻滅という失意の中で旅立とうとしていた。それと同時に中国人とのことを含め娘が思い通りに育たなかったこと、また娘を数学の教師にするという夢にも破れたのである。デュラスは数学ではなく、フランス語が首席であったのである。

お嬢さんはフランス語では首席です。母は何も言わない、何にも、不満なのだ、[……]
母はこう尋ねるのだ、で、数学のほうは、こう言われる、まだそれほどでも。

デュラスは愛人との別れの中にも将来は作家になるという夢を抱きフランスへ向おうとしていた。デュラスは「自分の本質をなす確信、やがて自分はもの書きになるという確信の奥底で、自分自身を最も深く確信」していたのである。その娘の姿は母親の惨めさを際立たせていた。この港からの母親と娘の旅立ちには母親の失意と娘の将来への夢という対照的な姿が見られたのである。

5. おわりに

この論文を書くにあたって私はヴィンロン、サデック、サイゴンを訪れ、『愛人』の中に描かれた母親と娘の葛藤の舞台となったインドシナの風景の中に伝記的事実を求めた。

ヴィンロンは夫の死後、再びインドシナへ戻った時、母親が最初に住んだ町である。現地の子供たちにフランス語を教え生計を得ていたこの頃は、貧しさの中にも家族に幸福感が漂っていた。しかしインドシナの地に未来を託し、カンボジアのプレノップに払い下げ地を購入した時から家族の悲劇は始まった。その直後、母親はサデックの女子小学校の校長に任命される。払い下げ地の不正による母親の怒り、怒りの爆発が誘発した母親の狂気、サデックは母親の愛と怒りによって特徴づけられた場所であった。サイゴンはインドシナへの夢を諦め、すべてを処分し、母親が挫折と幻滅という失意の中でフランスへ向おうとした場所であった。つまりインドシナの風景は母親とは分かちがたいものであり、母親そのものである。インドシナの風景こそ母親そのものを象徴するものであったのである。デュラスはそのインドシナを次のように描いている。

あの国には季節の違いはない。いつも、同じ一つの、暑い、単調な季節、ここは地球

『愛人』の中の母と風景

の上の細長い熱帯，春はない，季節の甦りはない。

母親にとっても，娘にとっても，母親と娘の関係においても，愛人との関係においても，インドシナは「暑く，単調な」国であった。少女時代は「長く，暑く，単調な季節」であった。その中に母親が存在していたのである。インドシナの風景はその意味ですべてを象徴していたと言える。

デュラスはインドシナの風景の中で生まれ，培われた体験を作家になって描きたかった。善良な母親の娘として，植民地の社会の犠牲となった母親を，親切で信じやすかった母親をデュラスは描きたかったのである。しかしそこには常に母親との葛藤が存在していた。愛人の存在はインドシナの風景の中に母親を描くための接点であった。つまりデュラスにとってインドシナは作品のすべてであったのである。

すべてはそこで，愛人の年の後で停止しています。作品の中で，その後に私が体験したことはすべて何の役にも立っていません。スタンダールが言っている通りです，子供時代は果てしないのです⁷⁾。

母親との関係は「書くこと」を認めてもらうための長い葛藤であった。『太平洋の防波堤』(1950) から始まる母親との長い葛藤はこの『愛人』(1984) の中で終わったのである。『愛人』は母親への鎮魂の小説でもあった。母親のこと，自分自身のこと，インドシナのことすべてを書きつくし，『これでおしまい』 *C'est tout.* (1995)，「これですべて」と書き残しデュラスは息をひきとったのである。

注

- 1) DURAS, Marguerite: *L'Amant*, Gallimard, 1984, p. 10.
『愛人』からの引用は煩瑣になるため以下注番号と頁数を省略する。
- 2) HANN, Pierre: "Marguerite Duras: Les hommes de 1963 ne sont pas assez féminins", *Paris-Théâtre* n. 198, 1963, p. 34.
- 3) VIRCONDELET, Alain: *Duras*, François Bourin, 1991, p. 22.
- 4) DURAS, Marguerite: *La Vie matérielle*, P.O.L, 1987, p. 27.
- 5) デュラスとインドシナを語る時，忘れてはならないもう一つの作品がある。デュラスにとって「起源の小説」と言われる『太平洋の防波堤』(1950) である。しかしこの小説の舞台はカンボジアのプレノップであり，今回の調査からは外れる。この点については次の調査を待ち，別の機会に述べたい。
Cf. 拙論「デュラスにおける家族像 ―母への愛と母からの解放―」，『女性空間』第12号，日仏女性

佐藤 浩子

研究学会，1995年。

- 6) *Apostrophes*, prod. Antenne 2, émission de PIVOT, Bernard, réalisation CAZENAVE, Jean, diffusion 28 septembre 1984.
- 7) ALPHANT, Marianne: "Duras à l'état sauvage", *Libération*, 4 septembre 1984.
インドシナの地図：LIGOT, Marie-Thérèse: *Un barrage contre le Pacifique de Marguerite DURAS*, Gallimard, 1992, p. 166.